

北アイルランドにおける「コミュニティ開発」の語り

——映像アーカイブ『私たちの世代』の分析から——

福 岡 千 珠

0 はじめに

本論文の目的は、宗派間で分断されてきた社会において、コミュニティ開発という運動が、どのように平和構築に貢献したのかを明らかにすることにある。

北アイルランドにおいては、紛争が激化した1970年代以降、権限が制限されていた地方自治体の代わりに、地域に根差したコミュニティ・グループが草の根レベルの福祉や生活改善を担ってきた。紛争を抱えた社会の諸問題にローカルな人々が直接取り組むことによって、女性やカトリック教徒の非エリートなど、ユニオニスト支配の時代においては公の空間から排除されていた人々が発言する領域が広がっただけではなく、地域や宗派を越えた取り組みが可能となったと考えられている。

しかし、ここで問いが生じる。ローカルな取り組みとして始まったコミュニティ開発が、その発展に伴いどのように平和な社会の構築につながっていったのかという点である。二点目に、ローカルな社会は、対立を生み出してきた社会的コンテクストが強く存在する場でもある。「コミュニティ開発」への取り組みは、既存の社会関係に対して、どのような空間を切りひらくことができたのか。今回は、北アイルランド第一の都市であり、紛争が最も激しかったベルファストに焦点を当てて、論じることとする。

1 「コミュニティ関係」と「コミュニティ開発」

北アイルランドは、1920年に成立したアイルランド統治法によって、アイルランドの南北が分割され、北部六州に自治が認められたことにより成立し

た。面積14,000平方キロメートルほどの土地に、連合王国に帰属意識を持つプロテスタント・ユニオニストと、独立アイルランドに帰属意識を持つカトリック・ナショナリストが存在することとなったのである。プロテスタント・ユニオニストは不平等な選挙制度などにより北アイルランドにおけるプロテスタント支配体制を確立したため、カトリックの人々は様々な点で抑圧・差別を受けるようになる。両者の間で対立が深まり、教育、住居、余暇など社会の様々な局面で宗派間の分離が進んだ。首府ベルファストでは、北部・東部にはプロテスタントの、西部にはカトリックの集住地区がそれぞれ形成された。1960年代にはカトリック教徒の地位向上を求めて公民権運動が起こり、それをきっかけに1969年以降「トラブルズ (the Troubles)」と呼ばれる武力衝突が勃発した。事態を收拾するため、1972年英政府は北アイルランド議会と行政府を停止し、直接統治に踏み切ったが、その後もパラミタリーと呼ばれる武装集団と軍や警察との間に様々な形の暴力が頻発した。「コミュニティ開発」と呼ばれる活動が見られるようになったのは、まさにその時期であった。

1969年以降、暴動が多発し、社会の安定が失われると、地域レベルで非常時のニーズに応える様々なグループが登場した。1973年の時点で500ものコミュニティ・グループがあったとされるが、そのほとんどが1969年から1971年の間に生まれたものである。こうした取り組みに対し「コミュニティ開発」という語が用いられるようになったのは、1969年にストーンモント政府が、「調和的なコミュニティ関係の構築の促進」を目的に「コミュニティ関係委員会 (Community Relations Commission: CRC)」を設置したときである。その際、コミュニティと行政を仲介する「コミュニティ開発職員」が設置された。ここでの「コミュニティ関係の構築の促進」とは、漠然とであるが二つの意味を持っていた。一つは、草の根コミュニティ・グループの支援であり、暴動が貧困地域から発生していることをふまえての地域の施設の改善であった。もうひとつは、宗派对立を解決するため、宗派を横断した活動を促進することであった (Cunningham 2001: 7-8)。しかし、CRCは失敗し、その後、政府レベルでは中央コミュニティ関係ユニットが設置され、さらに独立機関としてコミュニティ関係カウンスルが設置されることによって、「コミュニティ関係」と「コ

「コミュニティ開発」が区別されるようになる。「コミュニティ関係」アプローチは、「和解」に重点を置いたもので「北アイルランドの多様なコミュニティに対する承認、尊敬、寛容」(Lewis 2006: 8) の促進を目指すものであるとされた。

では、そもそも「コミュニティ開発」という語は、どのような意味で、どのような文脈で用いられていたのか。「コミュニティ開発」という概念自体は、アメリカに起源を持つ「コミュニティ組織 (community organization)」という概念の中に位置付けられる。コミュニティ組織とは、「コミュニティを構成する諸集団が、支援を受けながら共通の問題や目標を認識し、自ら資源を動員し、あるいは共同で設定した目標を達成するための戦略を開発し実践するプロセス」(川村 2003: 152) であるとされる。この概念は、十九世紀アメリカの移民や貧困層、都市の貧困地区への支援において重視されてきた。また、1950年代には、ソール・アリンスキーによって、外部権力に対抗するための「ラディカル」な組織化が提唱された(石神 2014)。当初、「コミュニティ組織」の考え方においては、「コミュニティ」は基本的に空間的・地理的な居住領域を指していた。その後、公民権運動、女性運動など社会全体の変革のためのアプローチとして広く採用されるようになると、共通の利害関心に基づく非地理的コミュニティも含まれるようになった(川村 2003: 152)。R・ラボンテ(2014)は、「コミュニティを基盤とした」プログラムと「コミュニティ開発」プログラムの重要な違いは、誰が取り組む問題を設定するかという点にあるとする。前者では支援者などが問題をあらかじめ設定するのに対し、後者では解決すべき問題は何かをコミュニティ・グループのメンバーが見つげ出すことが重要である(Labonte 2014: 103)。さらに、コミュニティとして取り組み、成果を出すことができる具体的な課題を設定することが重要となる。

なお、イギリスでは、ボランティア組織や NGO は、古くから存在し、特に20世紀以降は政府との密接な関係の下に活動してきたため、アメリカと比べ「コミュニティ開発」における「変革」や「対抗」を志向する側面が希薄である。「コミュニティ開発」を「コミュニティ・ビジネス」とほぼ同義で用いている報告もある(今田 2001)。それゆえ、アリンスキー的なラディカルな社会変革よりは、ロバート・パットナムが述べるところの、参加を通しての「コ

コミュニティ内でのつながりと信頼」(Putnam 2001=2006: 389)の構築と、それを通しての国家との協働が目指されているといえる。

要約すれば、コミュニティ開発のアプローチは、コミュニティによって始められ、基本的にはコミュニティに還元される「コミュニティ益」を求めるアプローチであると定義できる。「コミュニティ」による「コミュニティ」のためのアプローチである点で、利他的なチャリティとは区別される。また、家族や近隣でなされてきた「互助」に近いところにあるが「互助」のみでは終わらず、政府や自治体に働きかける点で外に開かれたアプローチである。

北アイルランドの文脈でも、「コミュニティ開発」は、多くの小規模なコミュニティ・グループが独自に地域の問題に取り組む活動を指す。しかし、北アイルランドの「コミュニティ開発」の特徴は、1969年の政治危機がきっかけになって発展したため、地域の問題に取り組むことを通じて、広い意味で地域の平和を促進することが目指された点であるといえる。また、北アイルランドの外部からも、これらのグループが地域の平和構築に貢献するのではないかという期待があり、多くの支援がなされた。しかし、「コミュニティ開発」のグループのほとんどは、ごく狭い地域内で活動し、またその多くが同じ宗派内で組織されたため、平和にどのように貢献するのかわかりづらいという問題点があった。また、80年代には政府内に反政府勢力への間接的な支援となっているのではないかという疑いも生じ、「コミュニティ開発」アプローチへの疑義も示された。このような「コミュニティ開発」の活動が、分断と紛争を抱えた北アイルランド社会において、どのような意味を持ち、どのように平和構築に貢献したのかが本論のテーマである。

2 先行研究

上記のような北アイルランドのコミュニティ開発を分析した先行研究としては、「コミュニティ開発」を「ボランティア・コミュニティ・セクター」に位置付けて分析するものと、市民社会として分析するものがある。前者において「コミュニティ開発」は、英国の福祉の多元化政策を受け、公的セクター／私的セクターと区別され、両セクターと協働しながらサービスを提供するサード

セクターとして位置付けられる (Acheson et al. 2004)。このアプローチでは、しかし、サービス提供という役割にのみ焦点が当たり、社会の変革や平和構築への貢献という側面が見落とされている。一方で、後者においては、社会や国家に対する批判的視点を持った市民社会として分析される。しかし、このアプローチでは、地域での活動そのものよりも、その結果として生じた政府レベルへの働きかけに焦点が当たる傾向にある (Cochrane and Dunn 2002)。また、政府や EU などの支援を受け、その資金を運用する主体として捉える分析もある (Byrne 2010)。事実、コミュニティ・グループは支援の主要な対象であり、ドナーと協力しながら地域の経済状況や失業を改善することが期待されてきた。しかし、外部からの支援だけがコミュニティ開発の活動を成り立たせていたわけではないため、活動のどの部分がどのように支援されたのかを分析することが重要である。

F・オハムイル (2012) は、北アイルランドにおけるコミュニティ開発は「紛争圏で争われる場」であったと指摘する。そして、北アイルランドのコミュニティ開発が、アリンスキーモデルのように最終的に社会構造の変化を求めているのか、それとも「システムの中でパワーエリートと協力しながらパートナーシップを築いたり、ロビー活動をしながら、相互の利益あるいは皆にとっての効率を求めて」(Ó hAdhmaill 2012: 65; 筆者訳。以下同様) いたのか、明らかではないと指摘する。コミュニティ開発の参加者自身も、その中に異なる目的を設定し、また国家や武装勢力などもコミュニティ開発に多様な機能を読み取り、それぞれの異なる目標の中で関与しようとしていたと指摘している。

オハムイルのいうように、社会的分断を背景としている北アイルランドの場合、「コミュニティ」という場自体も分断や紛争、そしてそこから生じる国家との関係性のねじれから自由ではありえない。「コミュニティ」による「コミュニティ益」の追求というとき、その「コミュニティ」自体が、既存のエスノナショナルな対立の場となる危険性を抱えているといえる。それゆえ、「コミュニティ」もまた、多様な主体によって「争われる場」である点に注意する必要がある。

上記の点をふまえ、本論では、「コミュニティ開発」を新しい政治参加の一形態として捉えるコクレンとダン (2002) の見方を踏襲しつつ、ナショナルなレベルではなく、地域社会においてその活動が置かれたコンテキストとその活動が行った地域社会の変革こそ重要であると考え。それゆえ、コミュニティ開発に実際に関わってきた人々が、どのようにその活動を語り、どのような意義を見出したかに注目する。

3 『私たちの世代』に見るコミュニティ開発の語り

本論では、上記の目的のためにベルファストのローカルテレビ局 NvTv による映像アーカイブに取められたインタビューをデータとして分析する。NvTv はスポンサーを持たず、助成金のみで活動するベルファストのテレビ局である。NvTv の制作した『私たちの世代』シリーズは、オルタナティブなベルファストの歴史を映像の形で記録し発信しようというものであり、その目的を以下のように述べている。

1960年代以降、非常に多くのことが北アイルランドについて述べられ、議論されてきたために、何か新しく言うべきことがあるか考え込んでしまうほどです。実際、報道の多くは、暴力、政治的グループ、イデオロギーの衝突、軍、警察、刑務所、そして後には長い戦争から和平プロセスへの変化に必然的に集中してきました。このアーカイブの意図は、「[それとは]異なる」ということです。それは、二つの世代の人々に関する隠れた遺産、というよりは記録されなかった遺産です。(NvTv ; [] 内筆者)

『私たちの世代』ではこうしたオルタナティブなベルファスト史の構築の試みの一部としてコミュニティ開発に様々な形で関わった人々のライフストーリーが取り上げられ (表1参照)、シリーズ全体の72本のうち28本を占める。こうした人々の個人としてのインタビューは非常に珍しい。その多くが1970年代、つまりコミュニティ開発の創成期に関わった人々である。注目すべきは、プロテスタントの語り手の多さである。コミュニティ開発への参加は、カトリック

表 1

製作年	Stories				
	語り手(言及された出自や属性)	語り手の主な活動	主に関わった組織やプロジェクト	主に関わった地域	時間
2009	Jim Deery	コミュニティ開発	Ashton Center	New Lodge	51:28
2009	Helen Bell	コミュニティ開発	Peace People (平和団体), Glencairn Community Development Association	Glencairn	38:17
2009	Mina Wardle	コミュニティ開発	Shankill Stress and Trauma Center	Shankill	38:55
2009	Roisin McGrone	コミュニティ開発 (若者の支援)	Ardmonagh Gardens, Belfast Education and Library Board Mobile Phone Network		1:05:58
2009	Dale Harrison	コミュニティ開発	Black Mountain Action Group (住宅、若者), the Greater Shankill Community Forum	Springmartin	32:25
2009	Father Desmond Wilson	コミュニティ開発、 コミュニティ教育	Conway Mill Education Project	west Belfast	48:37
2009	Helen Holland	コミュニティ開発	an ACE (Action for Community Employment) worker	Ballysillan	23:05
2010	Tommy Wilson	コミュニティ・ワーカー	Empire Community Center	Donegall Road	30:18
2010	Tura Arutura (ジンバブエ出身)	コミュニティ・アート、音楽	Artfrique (コミュニティ・カンパニー)		42:16
2010	Joe Baker	コミュニティ開発	ACE (雇用促進)、Ashton Center, New Lodge Festival	New Lodge	43:31
2010	Ruth Taillon (カナダ出身)	コミュニティ開発、 フェミニズム	Women's History (女性の歴史を書く、レクチャー)		53:09
2010	Kathleen Kelly	コミュニティ開発、 公務員	Belfast Action Teams, the Women's Information Group		50:26
2010	J.B. Valley	画家	Armagh Pipers Club (伝統音楽教育), National Athletics and Cycling Association	Armagh	21:34
2010	Vera Henderson (プロテスタント)	コミュニティ開発	the Recycled Teenagers (60代以上のクロスコミュニティ・プロジェクト) First Steps Women's Group	Dungannon	35:05
2010	May Blood	労働運動、コミュニティ開発	TGWU (運輸一般労働組合), Black Mountain Action Group, Women's Coalition (フェミニスト政党、1996-2006)	Springmartin	52:08
2010	John Scott	コミュニティ開発、 政治家	the Newtownabbey Foster Parents Association, Ballyduff Community House	Ballyduff	30:50

2010	Aodán Mac Poilin (アイルランド語話者)	コミュニティ開発、 コミュニティ教育、 アイルランド語教育	the Ultach Trust		38:17
2010	Noelle Ryan	コミュニティ教育 (Desmond Wilson の影響)	Springhill Community House, Conway Education Centre	west Belfast	29:44
2011	Catherine Couvert (フランス出身、レズ ビアン)	女性運動、フェミ ニスト	Just Books (書店)、Wom- en's News		39:38
2011	Anne McVicker	コミュニティ開発	Benefit Take-Up キャンペー ン、the Women's Tec	north Belfast	37:19
2011	Joe O Donnell	コミュニティ開発、 政治家	Short Strand Community、 元ベルファスト副市長	East Belfast	22:46
2011	Alan Houston	コミュニティ開発、 コミュニティ教育	Healthy Living Centre		41:57
2011	Betty Carlisle	コミュニティ開発	ダウン症の子供の支援、 Shankill Women's Centre	Shankill	43:26
2011	Joanna McMinn (コーンウォール出身)	コミュニティ教育	Open University, Derry Women's Centre, Hanna's House		43:31
2012	Darren Ferguson (グレンゴルムリー出 身)	コミュニティ・ アート、ミュージ シャン	Beyond Skin		46:05
2012	Annie Armstrong (カトリック)	コミュニティ開発	Tenant Association、リズ バーン市議 (シンフェイン 党)、Twinbrook Celebration Partnership	Twinbrook	59:04
2013	Mike Maloney (オーストラリア出 身)	ボランティア、サー カスや劇を通じての支援	Belfast Voluntary Service、 Belfast Community Circus		1:13:11
製作年 不明	Jackie Redpath (福音主義)	コミュニティ開発	'Save The Shankill' cam- paign, The Shankill Bulletin (ローカル新聞)、Greater Shankill Partnership, Belfast Action Teams	Shankill	

住民のほうがプロテスタント住民よりもずっと多く見られることはたびたび指摘されてきたが (Lewis 2006: 6; Byrne 2010)、このインタビューでは後述するメイ・ブラッドをはじめとするプロテスタントのコミュニティ開発リーダーが多く自分の経験を語っている。

インタビューは、基本的にインタビュアーとのマンツーマンで進められ、途中で映像がさしはさまれることはない。インタビュアーの質問は、基本的には「幼少時代」、「コミュニティ・ワークに関わることになったきっかけ」、「コ

コミュニティ・ワークで行ったこと」などから成る。それでは、コミュニティ開発について、実際に携わってきた人々はどのようにその経験を語ったのだろうか。

3-1 コミュニティ開発へ

まず、きっかけについて見ていく。「コミュニティ・ワークに関わることになったきっかけ」は全員に尋ねられる。以下のメイ・ブラッド¹⁾の語りにあるように、人々は実際に紛争、とりわけ1969年の危機によって影響を受けたことがきっかけであったと語る。

私たちは実際プロテスタントによって家を焼きだされました。(中略) その頃コミュニティは非常に恐れていました、人々が消えるからです。寝て次の朝起きるとまた隣人が2人いなくなっている、誰も彼らがどこに行っただのかわからない。(中略) それ [自宅の放火] は7月11日のボンファイアー²⁾のひと月前に起きました。母と父は幸運にもニューカッスルにいてトレーラーハウスで休日を過ごしていました。彼らはボンファイアーの火を私たちの家につけ、屋根全体が落ちてきて、家の窓も全部割れてしまいました。これは、はっきりとしたメッセージでした。父と母は相談をして、引っ越すことにしました。(Blood 2010)

メイ・ブラッドは、自身プロテスタントでありながら、プロテスタントによる脅迫によって家を追い出され、その移転先で住宅問題に直面したことがきっかけであったと語る。

当時1969-70年の間に、暴動や直接的な暴力、脅迫によって何千人もの人々が家を追われた。脅迫が実際何者によって、何を目的に行われたのかは明らかになっていないが、メイ・ブラッドの例にもあるように必ずしも「敵対する」宗派コミュニティによってなされたのではなく、同じ宗派コミュニティ内でも行われた。1969-73年の間にはベルファストで8,000世帯の人口移動があったとされ、郊外を含めた大ベルファスト地域では、計15,000世帯が家を追われたとの情報もある (Curtis 2014: 56)。メイ・ブラッドの住んでいたグロズヴナー

／ローデンストリートのエリアは、もともと両宗派の住む混住地域であったが、ニューアードイン／クロナードエリアについて転居者が多く出た地域で、1971年の調査では225世帯が自宅を離れたとの調査がある。ローデンストリート地域からは、プロテスタントの避難と同時に、カトリック世帯も転居を行い、その結果宗派間の住み分けが明確となった (NICRC 1971)。

この時期、コミュニティ開発という言葉はまだなく、政治的危機、コミュニティの突然の崩壊に対する反応として、安定した地域の生活を守る必要性が生じた。特にベルファストにおいては、この時期に互助や夜間見回り、炊き出しなどの活動が多く見られるようになった。危機に迅速に対応した層から新しいリーダーが生まれた。その一方で、この時期、聖職者など地域の穏健派のリーダーたちは社会の急激な変化と暴力に対して手段を講じることができず、人々の信頼を失っていった (Darby 1986: 95)。メイ・ブラッドはインタビューで以下のように述べる。

何年もお互い一緒に住んでいた人々が、お互いへの見方を変えるようになったのです。私は隣人のひとりがカトリックを指して、「あいつらは信頼できない」といったのを覚えています。私は、なぜ一夜にして敵になってしまうのか理解できませんでした。(Blood 2010)

J・カーティスによれば、「ロイヤリスト³⁾もリパブリカン⁴⁾も、紛争前のコミュニティを [ふりかえって]、物質的な状況の観点からではなく、貧困に対処することを可能にした結束力のある関係性と相互援助が存在した点で『素晴らしい場所』であったと述べる」(Curtis 2014: 49) 傾向にあるという。とりわけ貧しい労働者階級の地域においては、紛争勃発前にはコミュニティの結束が強かったことが記憶されている。結束が強く、宗派分断を越えた相互援助も存在したコミュニティは、紛争とともに失われた。また、紛争とともに、既存の地域のリーダーシップへの信頼も失われた。その文脈においては、「コミュニティ開発」への参加は、既存の共同体を基盤としているわけではなく、むしろ共同体の喪失への意識を背景としているということができる。

3-2 住民の会

多くの人々にとって、最初に参加した組織としての活動は、住宅の改善を訴える活動であった。ヘレン・ベル⁵⁾は、元いた家を焼けだされ、転居先のグレンカーンで様々な問題を抱えた住宅に直面することとなる。

紛争だけではありません。私たちがグレンカーンに家を持った時、私たちは間違いだったと気づきました。建物です。不幸にも、暖炉にガラスがつけられていました。それには煙フィルターが必要でしたが、とても高価でした。二週間に一度取り換える必要がありました。暖房システムにはラジエーターがなかった。取りつけていなかったんです。だから、上に上がって、お湯を流したり、風呂場に5回も入ってお湯を流す必要がありました。私たちは何かしなければいけませんでした。(Bell 2009)

公民権運動時から住宅問題はベルファストの大きな問題の一つであったが、1969年以降、紛争の勃発によって転居を迫られた人々は新たな問題に直面する。人々が移り住んだ新興住宅は、戦後に建てられた劣悪なものが多く、健康被害が出るほどであった (Curtis 2014: 63)。そのため、新興住宅地域に転居を迫られた人々は、そこで地域住民の会を結成し、住宅の改善を訴えることとなる。メイ・ブラッドはスプリングフィールドで、ヘレン・ベルはグレンカーンで、それぞれ女性たちを中心に住民の会を結成する。

インタビューで語られた住民の会結成と同時期に、シャンキルやフォールズといった、伝統的なロイヤリストおよびナショナリスト地域では、パラミリタリーと協力し、住宅への不満の表明や都市の再開発計画への抵抗運動を行った。その際、家賃ストライキやバリケードの構築、建物の破壊等の「直接行動」が見られた。一方で、スプリングマーティンやグレンカーン、モイヤードなどの新興地域の運動は、より平和的な手段が採用された。「三つのエリアすべてで、住民は〔欠陥住宅の〕状態調査を編纂し、修復と住宅の取り換えを働きかけるために、北アイルランド住宅執行部⁶⁾とデータを共有した。こうした証拠書類による裏付けと広報により重点を置くことは、住宅キャンペーンの重

要で効果的な戦略となっていった」(Curtis 2014: 63)。これらの地域の住民の会では、基本的には住宅の問題に限定し、欠陥を持つ住宅の改善を政府に訴え、関連諸機関と協力姿勢を取った。住民の会は、あくまで住民という立場で特定の団地や地区の住宅の改善を主張した。

しかし、こうした活動方針ゆえに、「住民の会」はパラミリタリーによる様々な反応を引き起こすこととなる。プロテスタント地域で活動をしているとパラミリタリーによって嫌がらせを受けたり、パラミリタリーの一員である家族を通じ、圧力をかけられた (Blood 2010)。カトリック地域では、住民の会とIRAの関係性はより複雑であった。ナショナリスト・コミュニティでは、住宅についての活動は、1980年代に住民単位の活動が有効であることを見たシンフェイン党やIRAによって、次第に占有される場合があった (Curtis 2014; Darby 1986)。シンフェイン党は、アドバイスセンターを設立し、住宅や福祉の権利にまつわる問題にも関わり始めた。「コミュニティ活動家やプロフェッショナルなコミュニティ・ワーカーの中には、シンフェイン党の本当の目的はコミュニティ・グループに入り込むことなのではないか、そのことがこの町のコミュニティ・アクションを深刻に停滞させるのではないかと懸念」(Darby 1986: 155) するものもいた。

上記のように、「住民の会」の活動は、政党やパラミリタリーとは一線を画し、行政の排除や暴力を伴わない形で、開かれた活動として組織され、のちの「コミュニティ開発」運動の一つの原型となった。しかし、その運動の地域における独立性には困難が伴った。

住民の会に対して、コミュニティ開発のもう一つの典型的な形は、コミュニティ・センターの設立である。ドネゴールロード・エリアのコミュニティ・センターを中心に活動したトミー・ウィルソン⁷⁾のインタビューでは、紛争の勃発によって、付近に安全な場所がなくなったことが活動のきっかけであったと語られる。

私が実際にコミュニティ・ワークに関わるようになったのは、そのエリアに育って、私たちのためのものがないと知っていたからです。(中略)

紛争が実際に街路で生じた時、私たちはこのエリアで何かする必要があるとよく分かったのです。若者が従事できる、若者だけではありません、年配の人々もです。彼らも大変苦しんでいましたから。(Wilson 2010)

これらのコミュニティ・センターの活動もまた、紛争に対してその影響を受けない、安全な空間を切りひらこうとするものであった。それは、女性たちの活動の場であり、高齢者に対するケアを提供したり、何よりも子供や若者が安心して活動する場を提供するものであった。インタビューでは、「子供たちには私たちがしたような経験をしてほしくない」(Wilson 2010)と述べられる。その背景には、若者が行き場をなくし、パラミリタリーの一員となり、紛争を再生産することへの懸念がある⁸⁾。

上記のように、コミュニティ開発の活動は、パラミリタリーによる活動やそれらとの連携のもとで行われる活動と一線を画すことにその意義があったといえる。ベルファストの労働者階級地域において、パラミリタリーに関連する活動と一線を画すことはしかし、容易なことではない。コミュニティ開発に携わる人々は、(1)新しい活動の方法、とりわけ政府機関との連携、(2)北アイルランド全体ではなく「地域」ごとの活動、(3)パラミリタリーに影響されない空間の確保、という三つを通してそれを実現したと考えられる。

3-3 クロス・コミュニティ・ワーク

その後、コミュニティ・グループは、宗派を越えた活動を意味するクロス・コミュニティ・ワークも生み出す。J・ダービー(1986)は、1970-80年代のローカルなコミュニティ間関係を研究し、一定のクロス・コミュニティ・ワーク、つまり宗派間を越えた活動があったことを指摘している。その中で、宗派間の暴力を経験し、物理的・社会的分断があった地域では、カトリックとプロテスタントを集まらせ、話し合わせ、和解に至らせようとする「和解」を目的としたグループは成功しなかった。むしろ、失業や単一親家庭の育児といった共通の課題に取り組むグループには、両宗派集団からの参加が見られ、「共通の物質的、社会的利害があれば宗派間の疑念を乗り越えることが可能になるこ

とが証明された」(Darby 1986: 172)と指摘する。また、そうしたグループでは、宗派に関する問題は決して議論しないことがルールであった (Darby 1986: 135)。

インタビューでは、メイ・ブラッドが、住民の会を設立して10年ほど経ち、ある程度達成感を得られたことから、カトリック側の同様の住民の会と交流することを考えたと述べている。

簡単ではありませんでした。10年かかりました。でも次第にこの団地がよくなって、私たちがのぞむようになっていったんです。自分たちの団地がよくなるにしたがって、きれいになって、だいたい80年代半ばころですが、ある夜誰かがこういったのを覚えています。(中略)『[ピース]ウォールの向こうでは何をしているのかしらね』。それが私の琴線に触れたんです。私は工場でウォールの向こう側の [カトリックの] 女性たちとずっと働いていましたから。(中略) [でも、相互に] 猜疑心が強かった。彼女たちは私たちをプロテスタントであり、プリティッシュであると見ていました。だから、自分たちに出て行ってほしいのだと。私たちは、彼女たちをアイリッシュであって、統一アイルランドを望んでいると見ていました。(Blood 2010)

ベルファスト西部近郊のスプリングフィールドは、新興の住宅地で、ピースウォール⁹⁾を隔ててカトリック居住区とプロテスタント居住区が存在した。そして、どちらの地区においても住民の会が結成されていた。メイは、その両者を連携させようと試みたのである。カトリック側の住民グループとの協力は、もちろん簡単になされたものではなかった。当初クェーカーによって平和を目的に設置されたクェーカー・ハウスで会議がもたれたが、相互不信がうずまいていたという。人々をさらに参加させるために、メイ・ブラッドが考えたのが、中心部にある高級ホテル「エウロパホテル」で会議を実施することであった。その理由をブラッドは、「私たちは誰もエウロパホテルに入ったことがなかったから」、そして「無料のランチ」を提供できるためだという。恐怖と相

互不信が根強いいため、人々は「和解」や「相互理解」のためだけに町中に出てこようとはしない。女性たちを動かすのは、安全で、カトリック、プロテスタントどちらのテリトリーでもない、魅力的な場所の確保であり、そこでの新奇な体験であった。高級ホテルはそのために選ばれたと考えられる。

会議のあと、私たちは政治的問題を置いておこうと決めました。私たちが一緒に取り組めることを見ていこうと。私たちは同じような問題を抱えていました。住宅や健康状態の悪さ、教育レベルの低さ、多くの男性の自殺もありました。ティーンエイジャーの妊娠も。どちらの側にも。それで私たちは資源をプールすることに決めました。実際、それが20年間続いているんです。(Blood 2010)

ここでは、紛争のさなかでも、クロス・コミュニティ・ワークが継続した三つの要素が読み取れる。まず、個人単位ではなく、既存の「住民の会」同士が連結する形で行われたこと、二つ目に問題を拡大せず、地域での取り組みが可能な、実際の課題に限定すること、そして三つ目に「政治的問題」、つまりエスノナショナルな違いを議論しないということである。この三つの要素を採用するということは、活動をエスノナショナルな既存の組織の活動形態から意識的に差異化し、切り離すことを意味した。

具体的な課題の共有と、政治問題の回避は、女性のクロス・コミュニティ・グループであったウィメンズ・インフォメーション・グループ(WIG)にも見られた。WIGは、女性たちの情報共有を目指し結成されたグループである。女性運動家ジョアンナ・マクミンは聞き手として参加したインタビューの中で、WIGを回想しこう語っている。「私は最初のころを知っています。WIGは最初の段階では非常に『生活に関わる諸問題』に集中していましたよね。数年後、女性の選ぶべき権利などについて議論がされるようになりました」(Joanna McMinn in Kelly 2010)。つまり、WIGでは、当初政治やフェミニズムに関する議論はほとんどされず、具体的な取り組みに終始していた。そのことによって、WIGは他の女性グループから批判を受けたと述べられる。

私が覚えているのは、かつて、あなた [ケイト・ケリー] がフェミニストグループと呼んでいたグループと、ウィメンズ・インフォメーション・グループ (WIG) は緊張関係にありましたよね。それらの [フェミニスト] グループは WIG を政治的ではないと批判しました。差異や紛争に明らかに取り組んではないと。(Joanna McMinn in Kelly 2010)。

しかし、他の女性グループが各宗派内で主に教育を受けた女性たちの中で結成されていたのに対し、WIG は例外的に労働者階級の女性たちが主体となり、宗派を越えた活動を行っていた (McWilliams 2002: 375)。ここでも、WIG という女性たちによる「コミュニティ開発」の活動は、「生活に関わる諸問題」に集中することによって、「政治的」になること、あるいは世界的な「フェミニズム」にリンクすることを回避する。しかし、それによって、紛争を抱えた労働者階級地域におけるクロス・コミュニティな活動を可能にしているのである。

分断を越えた「コミュニティ開発」のアプローチとして、インタビューで言及されたものにはもう一例ある。1988年に始められた「携帯電話ネットワーク」である。この取り組みは、ピースウォールによって隔てられた地域のカトリックとプロテスタントの若者グループにそれぞれ携帯電話を持たせ、何か騒ぎがあった場合に若者自身に相互に連絡を取らせるというものである。カトリック居住区とプロテスタント居住区が壁を隔てて隣接するインターフェイスと呼ばれる地域では、小さな騒ぎや物音でも暴力へと発展する。互いに姿が見えないからこそ最悪の事態を想像してしまうからである。その事態を避けるため、若者グループが携帯電話で24時間365日相互に連絡を取り合うことにしたのである (McGrone 2009)。

このプログラムにも、コミュニティ開発アプローチの3つの要素が見て取れる。一つは、若者は個人ではなく既存のグループ単位で参加できるという点である。二つ目に、それらのグループは互いの歴史や文化の違いについて話し合うことはしないということである。三つ目にコミュニティ益に関わることを行うということである。この場合、ふだん小競り合いを続ける若者グループ同士の衝突を回避することによって、塀を隔てて隣り合っている地域の安定に貢献

することができる。「和解」や「相互理解」といった抽象的な目標を定めるのではなく、若者グループ間の衝突の回避という具体的な目標を定めることで、実際に目に見える成果を生み出すことが可能となる。また、おそらく、各参加者にとっては、この時代に携帯電話を持てるという現実的な利益があったと考えられる。

上記のように「コミュニティ開発」の意義は、不安定な社会における生活の改善を、近隣地域の居住を基礎とした住民の「コミュニティ益」として追及することにあった。「コミュニティ開発グループ」の語りで繰り返し強調されるのは、諸問題に「コミュニティ」として取り組んだという点であり、活動の領域性である¹⁰⁾。例えば、伝統的な「互助」組織は教会を中心に宗派ごとに組織されてきた。パラミタリーや政党も宗派集団ごとに組織された。それに対し、活動の領域が限定的である点で、「コミュニティ・グループ」は地域社会の既存の組織と区別された。また、WIGについて語った引用にも見られるように、「コミュニティ・グループ」は特定のイデオロギーを掲げず、領域内の具体的な問題に限定した点で、フェミニズム組織や労働組合とも区別された。つまり、北アイルランドの文脈では、「コミュニティ」は地域社会に新しく作られた最小単位を意味し、「コミュニティ」として取り組むということは、諸問題を「市民」や「宗派集団」の問題とせず、特定の地域の個別具体的な問題としてのみ取り扱うことを意味した。さらに、それにより、諸問題を既存のエスノナショナルな対立構図に位置付けることに抵抗することを意味した。こうした姿勢により、「コミュニティ・グループ」は地域社会において、既存の諸組織と自らを区別して活動することが可能となったと考えられる。

3-4 公民権運動の逆説的な影響

上記のように、「コミュニティ開発」グループは、地域の諸問題に取り組みつつ、それらを各地区を越えて広げず、「市民」や「宗派集団」の問題として主張しないことに特徴があった。「市民」の問題としなかった点については、「コミュニティ開発」が広まる直前に力を持った公民権運動の影響があると考えられる。では、その影響とはどのようなものなのか。

同じ映像アーカイヴに公民権運動時代、「人民の民主主義 (People's Democracy: PD)」を設立したメンバーの一人であるファergus・オヘアのインタビューがある。オヘアは公民権運動について「[公民権運動の目的は] ここに問題があり、ウェストミンスターにそのことを知らせればいだけだと考えていた」「権力の座にある人々はそれを維持したいと思っていた、私たちの公民権運動は、それを危機にさらした」(O'Hare 2010)と述べている。さらに「私たちは若くナイーブだった」(O'Hare 2010)と繰り返し述べ、公民権運動が数々の暴動を引き起こし、紛争のきっかけとなったことを苦い口調で振り返っている。

公民権運動は、ユニオニスト政府のもとでのカトリック教徒の差別に対する抗議運動であった。公民権運動は、当時のアメリカの公民権運動やヨーロッパにおける学生運動の戦略を採用し、当時増加していたカトリック教徒のミドルクラスと、過激化した両宗派出身の大学生が主体となり行われた (Curtis 2014: 40)。公民権運動は、1960年代当初リパブリカン運動と密接に結びついていたが、1967年に結成されたNICRA (Northern Ireland Civil Rights Association) は武力闘争との決別を目指した。オヘアらが1968年に設立したPDは、NICRAよりもさらに左翼主義的傾向の強い運動を展開し、北アイルランドの問題を「階級闘争」と位置付けた (Arthur 1974: 108)。PDは1969年に、混乱を引き起こすことが予想されたベルファストからデリーへの行進を断行し、それ以降紛争が激化した。公民権運動が紛争を引き起こしたのか、それとも一つのきっかけに過ぎなかったのかについては意見が分かれるが、その後の紛争の触媒となったことは議論の余地がない (Curtis 2014: 45)。

こうした運動がなぜプロテスタント住民の強い反発を招いたのか。ルアンとトッド (1996) はこの点について興味深い指摘をしている。

公民権運動の最も印象的な側面というのは、それが世界的な抗議文化と若者文化の側面を共有しており、[北アイルランド特有の] 文化的諸問題を意図的に無視していたという点である。『ブリテン市民のためにブリテンの権利を』というスローガンには皮肉がこめられていたかもしれないが、それ [スローガン] がとにかくも可能であったということは文化的問題が [一時

的に] 棚上げされていたということを示す。(Ruane and Todd 1996: 185)

つまり、公民権運動は既存の北アイルランド特有の文化的、あるいはエスノナショナルな諸問題を「意図的に無視」するために、当時世界的に見られた、アメリカの公民権運動やヨーロッパの若者運動、左翼運動の言説や戦略を採用した。しかし、その戦略は結果として、既存の北アイルランド社会を保持しようとしていた人々を追い詰め、最終的に紛争の勃発につながった。それは、公民権運動が普遍的な権利として「公民権」を主張したにもかかわらず、北アイルランド社会において分断を越えた連帯を生むことはなく、プロテスタント住民は公民権運動はカトリックのものであるという疑いをもち続けた (Curtis 2014: 41-3) ためである。「公民権」という概念は、結局北アイルランド特有の文化的コンテクストから逃れることはできなかった。この結果、公民権運動以降の北アイルランド社会において、普遍的なものとして「公民権」や「人権」を主張することは困難になったと考えられる。

上記のように、住民の会、およびその後の「コミュニティ開発」活動において、住宅をはじめとする生活の改善が目指されるようになったのは公民権運動の影響によるところが大きい。また、生活の諸問題に取り組む際に、北アイルランドの文化的・民族的諸問題を「意図的に無視」する点にも、その影響が見て取れる。しかし、「コミュニティ開発」において、住宅の改善等が「住民」の権利として主張されても、「人権」といった普遍的な権利として主張されなかったのは、直前の公民権運動の逆説的な影響があると考えられる。また、「コミュニティ開発」が公民権運動のように一つの運動として統合され拡大することを目指すのではなく、地域の領域的な活動にとどまった点にも、公民権運動の「失敗」の影響が見て取れる。分断を抱えた社会においては、社会全体のラディカルな変革を目指すことで暴力が激化する恐れがある。その恐れを回避し、自らの住む地域内にとどまり、その領域内で可能な変化を積みあげることが「コミュニティ開発」の目標であったといえる。

4 言説としての「コミュニティ開発」

最後に個々の語りの考察から離れ、2010年代に「コミュニティ開発」を語るということの意味について考察したい。上記に見たように、北アイルランドの「コミュニティ開発」は、分断を伴う文化や歴史の領域とは意図的に一線を画し、コミュニティ益の促進を目指す日々の活動によって成り立ってきた。長く「コミュニティ開発」について当事者がそれについて語ったり議論することはまれであり、ときおりコミュニティ開発について語られるときは、公聴会や研究のためのインタビューの形を取り、前者は団体を代表し、後者は匿名の形で語りであった。

それでは、2010年代にローカルテレビの実名でのインタビューという形で「コミュニティ開発」について語られたことには、どのような意味があったのか。

その背景には、北アイルランド社会の変化がある。1970年代、80年代当時と比較しての大きな変化は、2010年代には社会に平和が戻ってきたことである。1998年には和平合意であるベルファスト合意が成立し、北アイルランド社会の日常は大きく変化する。このことは、「コミュニティ開発」もまた、紛争時の社会を前提とした活動から、ある程度平和が保たれた社会を前提とした活動へと変化してゆくことを意味した。和平合意後の社会の中で、もう一度「コミュニティ開発」を位置付けなおすことが求められていたといえる。

まず、そのために、2010年前後のインタビューを通じて、これまでの「コミュニティ開発」がそれぞれの地域で担ってきたことを、改めて、地域外の人々にも知らしめることが目指されたと考えられる。ローカルテレビを通してベルファスト全体にインタビューを発信することによって、紛争期がコミュニティの「喪失」や「混乱」の時代であっただけでなく、「コミュニティ」では様々な「再生」や「協働」の試みが見られたという記憶が共有される。その記憶の共有により、先人たちが「再生」してきた地域の集成としての「ベルファスト」という新しい地域アイデンティティの構築が可能となると考えられる。

また、二点目に和平合意後の社会における「コミュニティ開発」の意義を位置付けることである。例えば、地域ワーカーであるロシーン・マクグローンのインタビューでは、和平合意後も北アイルランドの社会には問題が多く、最大

の問題がセクタリアニズムであると語られる¹¹⁾(McGrone 2009)。ロシーンの主張の背景には、和平合意によってパラミタリーや政党間レベルでは合意に至ったが、地域住民から見れば根強く宗派間対立は残っているという認識がある。そして、コミュニティ・グループこそが地域レベルのセクタリアニズムに取り組めるのだという認識がある。「和解」を長期的な課題として位置付け、それに住民自身に取り組むことの重要性が主張されているのである。

三点目に、現代の「コミュニティ開発」は、紛争期のものとは変わってしまったとの認識がある。ベルファストで長くコミュニティ開発に携わってきたケイト・ケリーは自身のインタビューで、現在コミュニティ開発の「プロフェッショナル化」(Kelly 2010)が進んでいると語る。1970年代のコミュニティ開発においては、多様なキャリアを持つ人々が個人の資質と人的ネットワークを活用して取り組むよりほかなかった。しかし、現在では、高等教育機関でもコミュニティ・ワーカー育成のプログラムが整備され¹²⁾、コミュニティ・グループの組織の運営や資金援助のプロセスも官僚化し(Byrne 2010)、政府との連携もイングランドと大差がなくなりつつある(Acheson et al. 2004)。また、カトリック地区では現在でも「コミュニティ開発」への熱心な取り組みが見られる一方で、プロテスタント地区での関心が低いという宗派間ギャップも深刻化し、「コミュニティ開発」はカトリック住民に占有されたという見方も出ているほどである(Lewis 2006: 6)。これらの変化により、紛争勃発当時の「ボランティア・スピリット」が今は失われ、また政府や外部機関とは独立して物事に取り組む姿勢が損なわれてしまったと、インタビューでも多くの人が述べている。このインタビューでは、創成期の「コミュニティ開発」の成り立ちを、それに関わってきた人々が実名で語ることにより、コミュニティ・グループ主導で、人々のリーダーシップと資質に基づいて活動が進められてきた「かつての」コミュニティ開発のあり方が明らかにされ、その意義が確認されているのである。

以上のように、2010年代に「コミュニティ開発」についてライフストーリーとして語られたことは、紛争の勃発と同時に発展したそのアプローチが、和平合意とその後の社会的変化とともに何らかの変化を迫られていることを反映し

たものであるといえるだろう。

5 終わりに

以上みてきたように、草創期からコミュニティ開発に携わってきた人々の語る、「コミュニティ開発」活動の成果は以下のように要約できる。まず、地域住民を主体とした NGO グループが、領域的で可視的な「コミュニティ益」を追求することによって、既存のエスノナショナルな対立に回収されない新しい連帯を生み出してきたことである。また、エスノナショナルな組織が、シンボルや文化、歴史に関する言説によって構成されていたのに対し、コミュニティ・グループは、それらを意図的に排除し、実際的な活動と共通の利益によってのみ編成された。紛争を抱える社会において、コミュニティ益という「共益」（恩田 2014: 15）をもとにした活動は、互いの顔の見える小規模な地域単位で組織されたからこそ可能となり、それによって地域社会にオルタナティブな空間としての「コミュニティ」の空間を作り出すことが目指されたと考えられる。「コミュニティ開発」が目指していたのは、地域の外側の権力に対抗することではなく、地域の中にエスノナショナルな対立に回収されない「空間」を作り上げることであった。そして、そのことによって、「共的なもの」「公的なもの」への意識を生み出したことにあると考えられる。

コミュニティ開発のグループは、ベルファストの労働者階級地区に多く、「その力を過大評価することはできない」（鈴木 1995: 65）。しかし、「和解」のための「和解」に終始するコミュニティ関係アプローチに対し、コミュニティ開発アプローチは人々が今いる場所、つまり生活の場から平和にアプローチできる回路を開いたといえるのではないだろうか。

注

- 1) May Blood: ベルファスト生まれ。14歳で教育を終え、リネン工場で働く。すぐに労働組合に入り、その5年後職場代表になり、様々な訓練を受ける。脅迫により家を追い出され、スプリングマーティンに引っ越す。そこで Springmartin Residents' Association を結成する。1994年には Greater Shankill Partnership の情報担当として働き、その後 Women's Coalition の創設メンバーとなり、北アイルランドフォーラムに

代表を送り出す。バロネス。現在、上院議員。

- 2) プロテスタント／ロイヤリストの習慣。ボイン川の戦いを記念し、7月11日前夜にかがり火をする。
- 3) 強硬なユニオニストを指す。
- 4) アイルランド統一のためには武力闘争も辞さない立場をとるナショナリストを指す。
- 5) Helen Bell: Hopewell St. 生まれ。1974年 Glencairn Residents' Association を結成。のちにラジオ放送を聞き、Peace People にも参加し始める。Glencairn Community Development Association の職員となる。一時トルコに移住するもベルファストに帰国する。
- 6) 北アイルランド住宅執行部とは、1971年に地方委員会に代わり、公共住宅の管理を任された機関である。
- 7) Tommy Wilson: 4歳でコミュニティ・ワークに関わり始め、まず現在の Donegal Road Community Center を設立する。その後誘われて Empire Community Center の設立に関わる。その際、Belfast Action Team の支援を受ける。その後、Village Focus Housing Group の一員となる。MBE が与えられる。
- 8) マッキーとモンゴメリーは「パラミリタリー・リーダーは、今も昔も、若者たちに尊敬され、労働者階級のヒーローであるとみなされている。(中略) 彼ら [若者たち] はアウトサイダーとみなされないために、[パラミリタリーに] 参加しなければいけないと考えている」と述べている (McKee and Montgomery 1993: 316)。
- 9) カトリック居住区とプロテスタント居住区を隔てるために英国政府や警察等によって、建てられた壁のこと。
- 10) 「私はかつて非常にナショナリスト、リパブリカンな考え方を持っていました。統一アイルランドを得られなければ、何事もうまくいかない。(中略) ブリテンの一部であろうと、アイルランドの一部であろうと、私のコミュニティの人々にはあまり違いをもたらさない。前進への道は、私の育ってきた地域から見た個人的観点からは、地域の人々が団結するということです。そして、彼らが必要だと思ふことを実行するということです。」 (Baker 2010)
- 11) 「私たちが目を離してしまった最大の問題はセクタリアニズムだと思う。(中略) 政府のレベルで [セクタリアニズムに油断してしまった]。人々は非常に現状に満足してしまっただけで、和合意から10年で、すべて問題ない、といったように」 (McGrone 2009)
- 12) 例えば、アルスター大学に「コミュニティ・ユース・ワーク」のフルタイムのコースがある。

参考文献

- Acheson, Nicholas, et al. *Two Paths, One Purpose: Voluntary Action in Ireland, North and South*. Dublin: Institute of Public Administration, 2004.
- Arthur, Paul. *The People's Democracy: 1968–73*. Belfast: Blaskstaff Press, 1974.
- Birrell, Derek and Carol Wilson. “‘Making Belfast Work’: An Evaluation of an Urban Strategy.” *Administration*. vol. 41, no. 1, 1993, pp. 40–56.
- Bollens, Scott A. *On Narrow Ground: Urban Policy and Conflict in Jerusalem and Belfast*. New York: State University of New York Press, 2000.
- , “Governing polarized cities.” *Powersharing in Deeply Divided Places*. edited by Joanne McEvoy and Brendan O’Leary, Philadelphia: Philadelphia U.P., 2013, pp. 327–361.
- Byrne, Sean. *Economic Assistance and Conflict Transformation: Peacebuilding in Northern Ireland*. Abingdon: Routledge, 2010.
- Cochrane, Feargal and Seamus Dunn. *People Power?: The Role of the Voluntary and Community Sector in the Northern Ireland Conflict*. Cork: Cork U.P., 2002.
- Cunningham, Michael J. *British Government Policy in Northern Ireland: 1969–2000*. Manchester: Manchester U.P., 2001.
- Curtis, Jennifer. *Human Rights As War by Other Means: Peace Politics in Northern Ireland*. Philadelphia: University of Pennsylvania Pr., 2014.
- Darby, John. *Intimidation and the Control of Conflict in Northern Ireland*. Syracuse: Syracuse U.P., 1986.
- 石上圭子, 2014, 「アメリカにおけるコミュニティの組織化運動(1): ソール・アリンスキーの思想と実践」『北大法学論集』65(1): 26–48.
- 今田忠, 2001, 「英国のコミュニティ開発組織」『コミュニティ政策研究』3: 15–28.
- 川村尚也, 2003, 「健康教育のためのコミュニティ組織とコミュニティビルディング2」『経営研究』53(4): 151–165.
- Labonte, Rolald. “Community, Community Development, and the Forming of Authentic Partnerships.” *Community Organizing and Community Building For Health and Welfare*. edited by Meredith Minkler New Brunswick: Rutgers U.P., 2014, pp. 95–109.
- McKee, Jack and Roy Montgomery. Hearing 18.2.1993. *A Citizen's Inquiry*. edited by Pollak, Andy. Dublin: Liliput Press, 1998, p. 316.
- McWilliams, Monica. “Women and political Activism in Northern Ireland, 1960–93.” *The Field Day Anthology of Irish Writing, Vol. 5*. edited by Angela Bourke. Derry: Field Day Publications, 2002, pp. 374–377.
- 宮城孝, 2000, 『イギリスの社会福祉とボランティアセクター』中央法規出版.

- NICRC. *Flight: A Report on Population Movement in Belfast during August, 1971*. <http://cain.ulst.ac.uk/issues/housing/docs/flight.htm>. Accessed September 2016.
- NvTv. "About Our Generation." NvTv. <http://ourgeneration.northernvisions.org/about/>. Accessed September 2016.
- Ó hAdhmaill, Féilim. "Community Development, Conflict and Power in the North of Ireland." *Community Development*. Dublin: Gill and MacMillan, edited by Ashling Jackson and Colm O'Doherty, 2012, pp. 64-82.
- 恩田守雄, 2014, 『共助の地域づくり』学文社.
- Putnam, Robert, D. *Bowling Alone*. 2001. (=2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング』柏書房)
- Ruane, Joseph and Jennifer Todd. *The Dynamics of Conflict in Northern Ireland: Power, Conflict and Emancipation*. Cambridge: Cambridge U.P., 1996.
- 鈴木敏正, 1995, 『平和への地域づくり教育：アルスター・ピーブルズ・カレッジの挑戦』筑波書房.

映像資料

- Baker, John. "Our Generation." By Michael Elliot, NvTv, 2010. <http://ourgeneration.northernvisions.org/our-generation/personal-stories/joe-baker/>. Accessed September 2016.
- Bell, Helen. "Our Generation." By Pete Bleakley, NvTv, 2009. <http://archive.northernvisions.org/specialcollections/ogpersonal-stories/helen-bell/>. Accessed September 2016.
- Blood, May. "Our Generation." By Ann Hope, NvTv, 2010. <http://ourgeneration.northernvisions.org/our-generation/personal-stories/may-blood/>. Accessed September 2016.
- Kelly, Kathleen. "Our Generation." By Joanna McMinn, NvTv, 2010. <http://ourgeneration.northernvisions.org/our-generation/personal-stories/kathleen-kelly/>. Accessed September 2016.
- Lewis, Helen. *New Trends in Community Development*. Londonderry: INCORE, 2006. http://www.incore.ulst.ac.uk/policy/lilp/New_Trends_Com_Dev.pdf. Accessed September 2016.
- McGrone, Róisín. "Our Generation." By Aisling McGeown, NvTv, 2009. <http://ourgeneration.northernvisions.org/our-generation/personal-stories/roisin-mcglone/>. Accessed September 2016.
- O'Hare, Fergus. "Our Generation." By Aisling Nic Eoin, NvTv, 2010. <http://archive.northernvisions.org/specialcollections/ogpersonal-stories/fergus-o-hare/>. Accessed September 2016.
- Wilson, Tommy. "Our Generation." By Karina Moore, NvTv, 2010. <http://ourgeneration.northernvisions.org/our-generation/personal-stories/tommy-wilson/>. Accessed September 2016.